富谷市記者発表【資料 1-①】
令和 5 年 9 月 19 日
経済産業部産業観光課
担　当：高清水
連絡先：022-358-0524

「富谷茶」が「味の箱船」へ登録

世界中には伝統的・固有な在来品種や加工食品など、このままでは消えてしまうかもしれない、小規模な生産者による希少な食材がたくさんあります。

こうした食材を世界共通のガイドラインで選定し、その生産や消費を守り、地域における食の多様性を守ろうという取り組みが「味の箱船＝ARK OF TASTE ※通称アルカ」です。

本市では、9 月 30 日に富谷宿観光交流ステーション・とみやどをメイン会場に開催する「TERRA MADRE JAPAN 2023」に併せて、「富谷茶」の「味の箱船」登録を目指してまいりましたが、この度、9 月 14 日付けで「味の箱船」へ登録されました。

「TERRA MADRE JAPAN 2023」では、オープニングにおいて、今回の「味の箱船」登録のセレモニーを実施するとともに、富谷茶を含めて日本国内の「味の箱船」75 品をパネル展示や一部現物展示することとしておりますので、報道機関の皆様におかれましては、ぜひ取材していただきますようお願いいたします。

記

富谷茶　仙台藩祖伊達政宗公が京都から苗木を取り寄せ、領内で栽培させたことに始まるとされ、富谷宿の発展とともに富谷茶も富谷の名産として隆盛を極めた。昭和 40 年代には製茶もされていませんでしたが、市では 2017 年より富谷市シルバー人材センターなどと連携して、氣仙屋茶畑に残る在来種を増やす富谷茶復活プロジェクトに取り組んでいます。

味の箱船　1996 年に設立され、現在世界中で 6000 を越える動物、果物、野菜の品種と加工食品などが登録され、スローフードインターナショナルが運営しています。日本国内では富谷茶を含めると 75 の食材等が登録されています。

TERRA MADRE JAPAN 2023

日時　9 月 30 日(土)10:00～17:00

会場　富谷宿観光交流ステーション・とみやど、TOMI+、荷宿、町中会館

※オープニング　10:00～　とみやどステージ

●富谷坂松田地内茶畑 約 250 ㎡
「さやまかおり」450 本
「ゆめわかば」 100 本

●富谷清水沢地内茶畑（在来種）約 120 ㎡
「さやまかおり」240 本

●富谷清水沢地内茶畑 約 85 ㎡
「さやまかおり」230 本

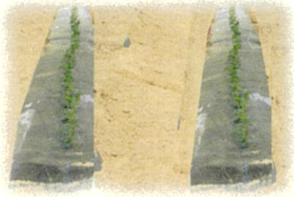
●シルバー人材センター「茶摘み式」

●「富谷茶」の煎茶と釜炒り茶

●公益社団法人 富谷市シルバー人材センター
〒981-3311 富谷市富谷新町 95（富谷市まちづくり産業交流プラザ（とみぷら）２階）
☎ 022-779-1388 FAX 022-358-5211 E-mail：info@tomiya-sjc.net

■清水沢地内茶畑
（原木在来種）

■新町地内茶畑 20 本(記念植栽)



■「とみやど」植樹 80 本(記念植栽)

■大童地内茶畑 4,700 本

■志戸田地内茶畑 1,300 本

■志戸田地内茶畑 1,000 本

■明石地内茶畑 1,000 本

■原地内茶畑 2,000 本

■宮城県 富谷市 経済産業部 農林振興課
〒981-3392 富谷市富谷坂松田 30
☎ 022-358-0523 FAX 022-358-2359 E-mail：nourin@tomiya-city.miyagi.jp

＜令和５年９月作成＞

富谷茶

TOMIYACHA

国分の町よりここへ
七北田よ
富谷茶のんで
味は吉岡

2020 富谷宿 開宿 400 年～ 歩みを再び
富谷茶復活プロジェクト

宮城県 富谷市

富谷茶の復活に向け、歩み始めました

2020年（令和2年度）に奥州街道の宿場町「富谷宿」の開宿400年を迎えるにあたり、市と公益社団法人富谷市シルバー人材センターと連携し、2017年(平成29年度)から「富谷茶復活プロジェクト」が始動しました。

シルバー人材センターでは、有志によってわずかに残っていた茶畑を活用して地元中学生と一緒に茶摘みを実施したり、3ヶ所（富谷市学校給食センター前、気仙屋、富ヶ岡公園）にお茶を栽培したり、地域住民と交流を深めながらお茶の栽培と富谷茶復活に向けたＰＲ等に取組んでいます。

市では、富谷茶の栽培による歴史の醸成と商品化を目指し、2018年（平成30年度）に日本紙通商株式会社と富谷茶（在来種）の苗木を育てる茶木の再生技術協力の協定を結び、育てられた苗木は2020年（令和2年度）から、市内の農家や農業法人が栽培を始めており、栽培等への支援や復活に向け連携を図りながら取組んでいます。

「富谷茶復活プロジェクト」に関する再生技術協力の協定・・・

日本製紙が紙の原料となる木材の安定確保のために開発してきた植林技術「容器内挿し木技術」(ネプラス)を用いて、富谷茶（在来種）の茶木からさし穂を採り、苗木に育てる再生技術協力についての協定を締結しました。

富谷茶原木(在来種)

「容器内挿し木技術」とは、組織培養でエネルギー源となる糖の代わりに高濃度のCO2と水と光を施用することで植物自身が持つ光合成能力を引き出し、挿し木による増殖を行う方法で育てられ、苗木となるものです。

（日本紙通商（株）開発の容器:セルトレイ(意匠登録済)を使用しています。）

富谷茶の栽培状況

富谷茶苗木

・2020年(令和2年度)から農家や農業法人により、富谷茶在来種が栽培されています。(令和5年8月現在)

■令和2年度:2,000本　栽培面積:約2,000㎡
■令和3年度:2,000本　栽培面積:約2,000㎡
■令和4年度:3,000本　栽培面積:約3,000㎡
■令和5年度:3,000本　栽培面積:約3,000㎡

・2020年（令和2年度）奥州街道の宿場町「富谷宿」の開宿400年記念植樹式を開催、100本を植樹しました。

■富谷宿観光ステーション「とみやど」:80本
■氣仙屋畑:20本

昭和40年頃の茶畑（富谷町誌より）

富谷茶の歴史

旧藩政時代（江戸時代）、富谷はお茶の産地でした。

現在の内ヶ崎家別邸近くの坂の上に茶畑が広がり「富谷茶」として知られていました。

仙台を起点に蝦夷松前（現在の北海道松前町）まで宿場を歌にした『奥道中歌』で「国分の町よりここへ七北田よ富谷茶のんで味は吉岡」と詠われたように、奥州街道を往来する旅人が緋毛氈(ひもうせん)の縁台の上で富谷茶を楽しんでいたようです。

富谷とお茶の関わりを古い記録の中では、元文2年（1737年）に、内ヶ崎家の5代目新三郎が仙台藩主にお茶を献上し、また、寛延4年（1751年）に渡辺源内が藩主から製茶を命じられ、お茶を差し上げたとの記録も残っています。

当時の製茶は品質もよく、京都まで出荷されたと伝えられています。

大正時代には30軒ほどの農家がお茶を栽培していましたが、時の移り変わりにより、次第に全国のお茶どころに押され、昭和45年頃に自家用として栽培を行っていた旅館「氣仙屋」が栽培をやめたことで、富谷茶の歴史は途絶えてしまいました。